令和８年１０月の現況と１１月の対策（果樹）

９月の実況（10月実況は次月掲載）

この期間は、高気圧に覆われ晴れた日もあったが、秋雨前線や湿った空気の影響で雨や曇りの日が多くなった。また、前線や気圧の谷の通過により大雨となった日があった。

福井では、平均気温は24.1℃と平年差＋1.0度と高く、降水量は198.5㎜と平年並み、日照時間は119.1時間と少なかった。最大瞬間風速が15m/s以上の強風は、3日、21日に記録された。

［以上、福井地方気象台の観測データに基づく］

１　ウメ

(1)生育状況　（園芸研究センター）

樹勢が弱い樹や夏季の高温乾燥の影響を受けた樹では落葉がみられるが、10月19日現在、本格的な落葉は始まっていない。

夏季から秋季にかけては、花芽が形成され発達する時期である。この時期の栄養状態が悪いと、翌年の花芽が減少し、不完全花が増加する。日照時間は、平年より7月は32%、8月は14%多く、9月は33%少なかった(図1)。7月から9月までの日照時間の合計は、平年より約32時間多かった。

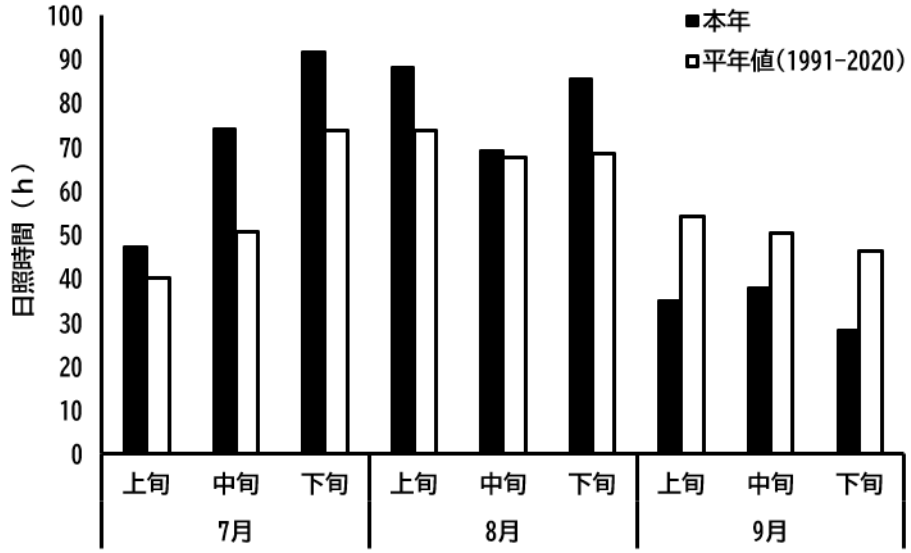


図1　旬別の日照時間（美浜気象観測所）

(2)地域状況

10月に入り各地区でせん定作業が始まっている。

２　ナシ

(1)生育状況　（農業試験場）

「幸水」、「豊水」の生育期と果実品質は表1のとおりであった。落葉は、10月20日現在、わずかに見られるが平年に比べ進行は遅い。

表1 ナシの生育期と果実品質(福井農試)

品種	年次	発芽期	開花期			収穫期		平均果重	糖度
		(月/日)	始期	盛期	終期	始期	終期	(g)	(%)
幸水	2026	3/24	4/8	4/10	4/16	8/9	8/19	417	12.7
	2025	3/28	4/17	4/19	4/24	8/18	8/27	300	14.5
	2024	4/1	4/10	4/14	4/19	8/14	8/19	355	12.7
	2023	3/20	4/4	4/7	4/12	8/9	8/16	368	12.5
	2022	3/26	4/12	4/15	4/20	8/17	8/22	372	12.8
	平年	3/23	10/11	10/14	4/19	8/14	8/24	423	12.8
豊水	2026	3/23	4/6	4/8	4/16	9/1	9/5	480	12.5
	2025	3/27	4/14	4/17	4/22	9/4	9/8	373	11.4
	2024	3/31	4/8	4/11	4/16	8/28	9/4	467	13.2
	2023	3/19	4/1	4/5	4/10	9/1	9/6	446	13.4
	2022	3/25	4/9	4/12	4/17	9/2	9/9	454	12.1
	平年	3/22	4/8	4/11	10/16	9/1	9/12	500	12.5

(2) 地域状況

坂井管内では10月22日、二州管内では9月25日に集荷を終了した。10月25日現在、いずれの地区も落葉が始まっている。

基肥の施用、粗せん定作業が行われている。今後、各地でせん定講習会の開催を予定しており、11月に入ると本格的なせん定作業が始まる。

3 カキ

(1) 生育状況 (農業試験場)

「刀根早生」の収穫は、10月5日 (前年10月5日) から始まった。10月1日時点の果実横径は、89.4㎜(前年84.5㎜、平年87.6㎜)で平年と比べやや小さく、前年、平年より大きかった (図2) 。

「平核無」の10月9日現在の果実横径は、89.6㎜(前年86.0㎜、平年89.3㎜)で前年、平年より大きいかった (図3) 。

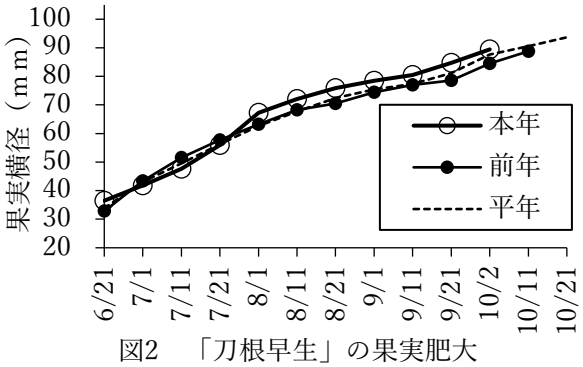


図2 「刀根早生」の果実肥大

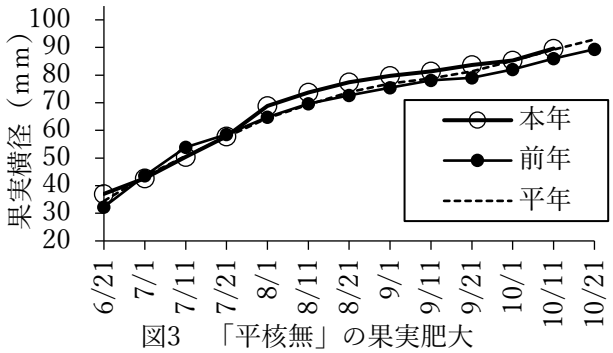


図3 「平核無」の果実肥大

(2) 地域状況

あわら市金津地区の「刀根早生」の集荷は、10月1日から始まり10月18日に終了した。平年に比べかなり大玉傾向であった。一部の園地では、日焼け果や十字型汚損果の発生が目立った。「平核無」の着色の進行は、平年より早くなっている。集荷は、10月15日から始まり、11月中旬まで続く見通しである。

4　イチジク

(1) 地域状況

若狭管内では、10月19日現在、17～20段を収穫している。気温の低下に伴い、果実の着色が進みにくくなっている。

5　ブドウ

(1) 生育状況　(農業試験場)

露地栽培では落葉が始まり、10月20日現在、「サニールージュ」で3割、「ブラックビート」、「藤稔」で2割、「シャインマスカット」で1割程度が落葉している。

(2) 地域状況

ハウスおよび露地ともに、葉の黄化が進んでいる。今後、各地でせん定講習会が予定されている。

対　策

1　各樹種共通

(1) 整枝・せん定　(おもにウメ、ナシ、カキ)

この時期の葉で合成された養分は、来春からの生育のために枝、幹、根に貯蔵されるため、樹体生育上は落葉を待ってせん定作業に取組むのがよい。落葉を待っていると作業が遅れてしまう場合は、11月中旬頃からせん定を始める。

ウメ、ナシ、カキいずれの樹種も3本主枝とし、それぞれの主枝につき亜主枝は1～3本以内に整理し、適正な間隔で側枝が配置できるように骨格枝を整枝する。

次に、側枝の更新を行う。年数の経った側枝は果実品質が低下するので、3～4年程度を経過した側枝は切除して、新しい側枝に切り替える。

樹冠が重なる園では、計画的に縮間伐を行う。

(2) 苗木の植付け

植付けまでに、明きょや暗きょを設置するなどして、排水対策を十分に行う。植え穴は大きさ1m×1m、深さ50cm程度を掘り、掘り上げた土に完熟堆肥(またはバーク堆肥)20kg、ようりん1kg、石灰類1kg、3要素入り肥料500gなどの資材を十分混ぜ合わせながら、埋め戻す。土と土壌改良剤等をなじませるため、植え穴の準備は苗木を植え付ける1か月前までに済ませておくのがよい。

苗木を入手してから植付けまでに日数がある場合は、根が乾燥しないように仮植えしておく。

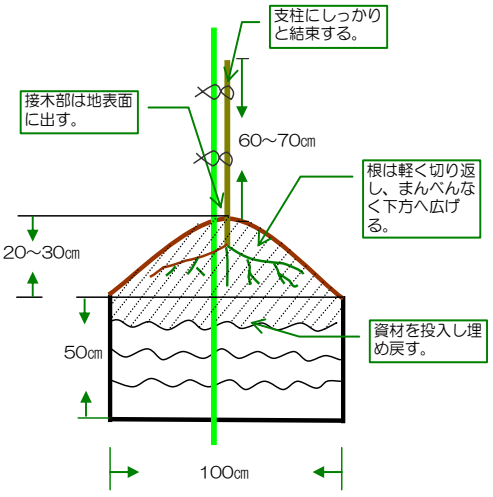


図4　植え穴づくりと苗木の植え方

苗木は根の先端を軽く切り戻し、接ぎ木部にテープが巻いてある場合は必ず取り除いておく。深植えにならないように接木部は地表に出しながらも、根が露出しないように5cm程度の厚さで覆土する。根と土をなじませるため、覆土後は根の範囲を軽く踏圧したうえで、十分量のかん水を行う。苗は地上部60～70cmの健全な葉芽の直上で切り返して(注意：樹種や整枝法によって切り返す高さは異なる)切り口にゆ合剤を塗布し、支柱を立てて結束する(図4)。

植付け時期は、ウメなどの落葉樹では降雪期までの秋植えとし、ミカンなどの常緑樹では春植えを

基本とする。秋植えでは、冬季の樹体凍結や雪どけ時のウサギによる食害を避けるため、苗木全体にワラなどを巻きつけて保護する。

(3) 基肥の施用

基肥は、来春の新梢伸長、果実の初期生育などを促進することを目的に、おもに11月に施用する。また、この時期に樹種、樹齢、樹勢などを考慮して、次年度の年間施肥計画を立てる。

(4) 越冬病害の防除

せん定枝や落ち葉は、翌年の病害虫の伝染源となるため、焼却するか園外に持ち出して土中に埋める。

(5) 土づくりと排水対策

スピードスプレヤや乗用草刈機などの踏圧により土壌が硬くなっている園では、有機質を施用した上で深耕するなどして土壌改良を図る。

水田転換園など排水不良な圃場では、冬季の湿潤な気象による滞水を防ぐため、排水路の通水を改善する。また、暗きょの設置や周辺排水路の整備などの対策を計画的に進める。

2　ナシ

(1) 越冬病害虫の防除対策

黒星病が発生した園では、越冬伝染源を少なくするため、落葉処理を徹底する。落葉は回収して園外に持ち出し、埋めるか焼却する。また、園内を乗用草刈機で走行して落葉を細かく破砕するのも効果的である。乗用草刈機による落葉処理は、刈刃の高さを地面がわずかに削れる程度に調整すること、落葉中期（11月上旬、11月下旬）の2回に分けて実施することがポイントである。

ハダニ類やニセナシサビダニは、成虫態で越冬するので、秋季に発生が多い園は翌春の発生も多くなる。落葉後のマシン油乳剤散布や粗皮削り(3月上旬)などの対策を実施する。

3　カキ

(1) 収穫

11月になると夜温が低くなるので果実の結露が著しくなる。特に晴天日の朝は結露が多いので、果実表面が乾くまで待ってから収穫するか、収穫後に果実を広げて乾かす。

収穫は着色の早いところから行い、果梗は短く切って他の果実を傷つけないようにする。カゴ、コンテナに果実を詰めすぎると、果実同士が傷つけあう原因となるので注意する。

過熟果は脱渋が進みにくくなる。また、脱渋処理中の果実温が低かったり、夜間に脱渋テント内の温度が低下し過ぎたりすると渋抜けが悪くなる。このため、収穫遅れや脱渋処理中の温度管理に十分注意する。

4　ブドウ

(1) 整枝・せん定

せん定は、概ね黄変落葉が完了してから実施する。単棟ハウスでは、天窓やサイドを開放するなどして外気温に近い温度管理に努め、落葉を促す。

短梢せん定では、骨格枝を2.0～2.5ｍの間隔で平行に配置する。骨格枝が最終の長さに達していない場合は、今年伸びた新梢を骨格枝として配置する。骨格枝として配置する新梢は、枝の色や太さなどから充実している部分を判断して切り返す。およそ8月中旬までに伸長した節位までが充実しているので、その節位を目安に切り返す。

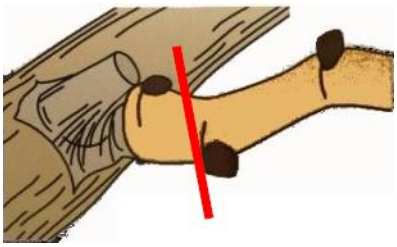


図5　1芽せん定位置

結果母枝は1芽のみ(基定芽を除く)を残し、せん去する（図5)。陰芽や基底芽から発生した新梢は、結果母枝の更新に必要な場合、予備枝として残す。

(2) 基肥の施用

落葉時期に窒素成分で年間施用量の8割を基肥として施用する(表2)。樹勢が強く、着色等が悪かった場合は施用量を減らす。また、土壌改良として石灰類、ようりん、微量要素肥料もこの時期に施用するが、石灰類は基肥施用から10日程度の間隔を空けて施用する。

表２　基肥施用量

樹　齢	Ｎ成分
１年生	70g/樹
２～３年生	180g/樹
４～５年生	300g/樹
成木	5.6kg/10a

５　キウイフルーツ

(1) 収穫

キウイフルーツは収穫期になっても果皮色に変化が見られないので、収穫適期は外観から判断できない。「ヘイワード」では果汁の糖度測定値が7～9％で収穫適期となる。収穫期の遅い「ヘイワード」では11月中旬頃に、それ以外の品種ではそれより早く収穫が可能である。霜に当たると貯蔵性が著しく悪くなるので、貯蔵する場合は霜が降りる前に収穫する。

収穫は、果実の温度が低い午前中に、果実をキズつけないよう丁寧に行う。樹上軟化した果実、病気や傷がある果実、落下果実は、健全果と仕分けて追熟する。

(2) 追熟

キウイフルーツは収穫後にエチレンによる追熟が必要である。健全な果実は自身でエチレンを生成しないので、エチレンを人為的に与える必要がある。果実温度15～20℃、エチレンガス濃度50ppm程度に保ちながら空気を常に循環させ、24～48時間程度処理する。その後、ガスを抜き、15℃程度で後熟させる。果肉硬度0.3kg程度が追熟を終える目安であり、以後は5℃以下の低温で貯蔵する。

果実量が少ない場合は、市販されているエチレンガス発生剤が手軽で便利である。なお、エチレンガスは可燃性なので「発生剤」の取扱いには十分注意する。